慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	東京都港区近代沿革図集
Sub Title	Historical album of a modern city : Minato Ward, Tokyo
Author	松崎, 欣一(Matsuzaki, Kinichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1971
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.43, No.4 (1971. 5) ,p.127(647)- 128(648)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19710500-0127

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

か。

(5)総じて、菊池氏は大化前代の民間の土地私有の問題には積極的であるが、大和国家の朝廷領や国造領の経営の実態についての関心が薄いような気がする。律令制土地制度の形成にあたり、それらの経営が一つのモデルになったことは考えうることであるから、律令国家の公権力を問題とする場合、朝廷領や国造領の果した役割に正当な評価を与えることは必要ではなかろうか。

また、さらに屯倉および国造領の経営については、大和国家の公権力という観点から眺めてみることも一案ではなかろうか。「令前租法。熟田百代租稲三束」という景雲三年格の記事は大化前代に溯りうるとする最近の田名網宏氏の説を承認すれば、百代三束という規格は屯倉や国造領における租法であるとまず考えうるし、また、これは国家の規制のあらわれと見ることも不可能ではなさそうである。従って、大和国家の公権力の問題は、それなりに検討されて然るべきではなかったかと思うのである。

「東京都港区近代沿革図集（赤坂・青山）」

港区立三田図書館編集　昭和45年3月刊

松崎欣一

目まぐるしく変貌を続ける東京の市街の変化のあとを港区という限られた地域ではあるが地図の上にたどろうという試みがなされた。本書は既に公刊された「港区史」の編纂過程で集められた資料を基礎として、いわゆる新住居表示制度の実施を機会に発刊が計画されたもので、全五分冊を予定される第一集として赤坂・青山地域についてまとめられたものである。

町名変遷表及び広範囲に資料を収集し一々の出典を明記した上で五十音順に整理した町名・地名等の由来の解説もそえられているが、中心となるのは地図上で港区地域における町名・町区等の変遷を明らかにしようというものである。

例えば新住居表示による元赤坂一丁目及び二丁目地域について

- 昭和41年
- 昭和7年（「東京市赤坂区地籍図」より編成されたもの）
- 大正10年（東京逓信局「東京赤坂区図」より）
- 明治29年（東京郵便電信局「東京市赤坂区全図」より）
- 明治18年（内務省地理局「東京実測図」より）
- 明治9年（東京市史稿市街篇附図「明治東京全図」より）
- 文久2年（「御府内往還其外沿革図書」より編成されたもの）

以上の時代を異にする七図をそれぞれ五千分の一の縮尺でA4版見開き二ページに表示している。従って「近代」沿革図集と称しているが、「御府内沿革図書」の収載によって江戸時代より現在に至るまでの同一地域の変化の過程を地域の名称及び区画の点において比較しうるわけである。

例えば元赤坂一丁目は江戸城外堀際にあった江戸時代以来の町地である赤坂伝馬町を核としてほとんど区画の変化なく現在に至

っている所であることを確認したり、ほぼ同一地点と思われる個所に記された文字が「紀伊殿→大離宮→仮皇居→赤坂離宮」とか、「青山下野守中屋敷→青山北町一丁目→陸軍大学校→青山中学校・都営住宅」というように変化していく過程で百数十年にわたる歴史の推移を眼のあたりにすることができるのである。またこうして本書の各図を比較してみると変貌目まぐるしいのは確かであるけれども、それはかなり表面的なものであって、東京の市街地の区画が基本的には江戸時代以来全く変化していないと言っても過言ではなく、例えば動きのとれなくなっている現在の東京の道路交通の禍根がここにあることを今さらのように気づかせる。

近年、切絵図を初めとして各種の江戸図や明治以後の東京に関するさまざまな実測図の複製出版などが盛んに行われて、それらの利用がかなり容易となったが、本書の刊行によって極めて限定された地域ではあるが同一縮尺の地図によって同一地域の時代的推移をこのように簡便に見ることが可能となったわけである。

本書は主として行政上の見地から出版されたものではあるが、歴史関係をはじめとしてさまざまな分野で利用しうる基礎資料として貴重なものであると思われ全冊の早い刊行を期待したい。なおこのように紹介を試みることは極めて簡単であるが、本書のような資料の収集及び検討そして編集にあたっては種々の困難があったと思われ、出版に関係された各位には敬意を表したい。

またこのような貴重な企画が他区においても試みられ、東京全域にわたっての近代沿革図集を見ることが近い将来において可能にならないものかと思うものである。